



Title	人社系の関わる京都大学の事例紹介と今後の共創研究に向けて
Author(s)	稲石, 奈津子
Relation	RA協議会第6回年次大会F-1セッション / 第8回JINSHA 情報共有会 報告書 : 異分野融合研究・プロジェクトにおけるURAの役割について考える
Issue Date	2022-04-22
DOI	https://doi.org/10.14943/RA6_F1.7
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87100
Type	conference paper
File Information	3_RA6_F1_1_Inaishi.pdf



人社系の関わる京都大学の事例紹介と 今後の共創研究に向けて

京都大学 学術研究支援室・シニア URA 稲石 奈津子

はじめに

ご紹介にあずかりました、京都大学学術研究支援室、通称 KURA と言っていますが、KURA の稲石です。本日のお話は異分野融合ということが一つテーマになっていますが、これ、学際と言ったり文理融合と言ったり、あるいは分野横断、異分野連携と様々な言い方があって、微妙にそれぞれニュアンスが違ってくると思うのですが、今日はまた他の方のお話にも出てきますし、説明しだすと長くなってしまいますので、割愛して進めさせていただきます。

本日のお話ですが、大きく分けて三つのカテゴリーで進めたいと思います。一つは、先ほど中野さんからご紹介のありました京都大学の学内ファンド、SPIRITS の事例に関して。2 番目は、学内にユニットと称されるものがあるので、それがどのようなものかという紹介と、その傾向。3 番目に関しては、今後に向けて人社系はどのように取り組んでいったらいいのかということがお話しできればと思っております。

SPIRITS : Supporting Program for Interaction-based Initiative Team Studies

最初に、SPIRITS ですが、この学内ファンドは、京都大学の研究大学強化促進事業の一環としてやっています。学際・国際・人際融合事業「知の越境」融合チーム研究プログラムで SPIRITS と言っていますが、今、三つの区分で募集を行っています。一つは国際型、2 番目にあるのが今日お話しする学際型、3 番目が産官学共創型です。2019 年度より、この三つのカテゴリーに対して「人文知の未来形発信」重点領域の応募枠というのも設置されています。

最初、2013 年度に立ち上げたときには、学際型・国際型でスタートしまし

た。5年ほどたってから産官学共創型というのがスタートしています。更に、指定国立大学の採択を受けて、人社未来形発信ユニットが発足しましたので、それに合わせて2019年度に人文知の未来形発信の重点支援がスタートしています。

KURA としてのかかわり方は大きく分けて二つあります。一つが運営で、もう一つが支援、個別の支援になります。2013年度当時から、制度設計とプログラム運営はKURAが担っています。審査は別に研究者の方々がされるのですが。支援も2013年度の当初から情報提供、チーム形成支援といった申請時の支援と、プロジェクトが採択されてからの伴走支援を行っています。ただ、支援の内訳については変遷がありまして、2013年度からしばらくは、URAがプロジェクトコーディネーターとしてチームメンバーにあらかじめ入っていることが前提となっていました。特に2013年度の初年度は、必ずURAを入れるよう義務付けられていましたが、URAの果たす役割がまちまちだったこともあり、2016年度からプロジェクトコーディネーターとしてURAが入るのはマストではなく、入らない場合は窓口URAというのを配置しています。さらに、2019年度からは申請書のブラッシュアップは行わないと明記するようになりました。それ以前は、部局URAが結構支援していたのですが。また、公募要領にURAによる具体的支援について内訳を掲載し、採択後に全プロジェクトに窓口URAを配置するような形になっています。このように、URAの役割のうち、支援のほうに関しては試行錯誤が何段階もありました。全体の整理に関してはこのような形です。スライド4ページにまとめてあります。

スライド5ページが、学際型のSPIRITSに関して、採択課題の中で人社系研究が含まれているものをリストアップしたものです。現段階で10件ぐらいしかないのですが、この表で色分けしてあるのが、プロジェクト側が設定したキーワードで、人社系研究分野、学際的な研究分野、自然科学系研究分野、社会貢献的な取組で色分けしています*¹。

もう一つ、スライド6ページが産官学共創型と人社重点支援をリストアップしたものです。産官学共創型に関してはそのカテゴリーだけのものもあります

が、人社重点支援に関して言えば、人社重点支援の国際型、人社重点支援の学際型という感じで、人社重点支援だけで完結するのではなく、三つあるカテゴリーに人社重点支援というのがかぶさっているというふうにお考えください。こちらも、傾向に関してキーワードを色分けしてあります。

これらに関して簡単な分析を行うと、SPIRITSの学際型で今まで全42件が採択されていますが、そのうち人社系研究が入っているものが10件で、全体の割合としては24%程度です。新しいカテゴリーの産連に関しては、産連全体で7件採択のうち3件人社系が採択されていて、こちらは学際と比べるともう少し割合的に多いです。学際は全体としては、例えば理系の異なる分野で学際研究をしているような例も多く、4分の3ぐらいがそのタイプですので、理系と文系の両方でやっているものは4分の1ぐらいとお考えください。

キーワードから見える傾向としては、一つはもともと学際的な学問領域というのが一定数あるということ。例えばELSI系のものや科学史などは、科学が関係するものに史学といった人社系の研究テーマが合わさっている学際領域的なものです。あと、社会貢献や社会実装、アウトリーチといったものを目指しているケースが多い。テーマ的にはELSI、高齢化社会、あとは、データベース、アーカイブ、デジタル・ヒューマニティーズなど、情報学系のものが比較的多いです。人社系の分野としては、公共政策や経済という社会科学はやはり入ってくるのですが、人文学に関しても結構多くて、ELSI系の倫理学に限らず、史学や哲学も入っています。京大の特徴としては、防災研究所があるためか、防災分野が入ってくる。防災に関しては、公共政策、都市づくりやまちづくりといったことも関わってくるので、政策的な面も含めて入ってきている。あと、京大のSPIRITSの特徴と言えると思いますが、3件ぐらい宇宙関連のものが入っています。具体的にどのような研究かというと、例えば、宇宙人とファーストコンタクトしたときにどのように接するべきか、文化人類学の知見を応用して考えるといった、少し倫理・哲学的なものなどが含まれています。

以上が傾向ですが、URAの果たす役割をここでご説明しておきたいと思います。伴走支援の例ということで、一つの例を挙げています。SPIRITSの学際型で、今で言うELSIの研究で採択された先生の例です。何年後かに他の先

生が代表の国際型 SPIRITS の 1 チームとしてこの先生の研究チームが、再度、SPIRITS に採択されています。他にもこの先生に関しては、民間助成財団への申請、国際シンポジウムの学内申請や報告、科研費の国際共同研究なども支援して採択されています。ちょうど、今年から JST-RISTEX の ELSI 関連プログラムが新しく始まりましたが、そちらもこの先生として採択されています。このように何年かがかりで外部資金の獲得支援を中心に支援を続けています。この SPIRITS の学際型の終了後の目的の一つに、研究費で比較的規模の大きなものに採択されるというのがありますので、その目的に合わせる形で支援を行っているという例です。

次に伴走支援で果たす役割についてご説明したいと思います。スライド 9 ページになります。申請時、支援中、終了時、終了後と大きく分けましたが、申請時は、研究者の紹介ですとか SPIRITS 自体の趣旨説明、情報提供。支援中は、広報に関する支援ですとか、支援中に発生する外部資金の申請支援、派生事業に関する研究者の紹介、KURA の他の事業への紹介や連携というのもあります。KURA の URA は人数が多いので、スケールメリットを利用して、例えば国際関係の URA を紹介したり、産連担当 URA に紹介したり、企画、広報 URA のほうに紹介したり、文系以外の他地区の URA の人に紹介したりということで、活動の幅を広げるのに役立っていると思います。あと、終了時は、報告書の作成などがありますが、先ほどの伴走支援の例のように新しい外部資金をとりに行くときなど、チーム形成時に支援したり、学内の他の組織の紹介などもしています。

スライド 10 ページには、学際研究のメリットと、URA に求められていることが書いてありますが、これは、昨年度、「人文知の未来形発信」重点領域関連セッション、先ほどご説明差し上げた人社重点領域のセッションで、「学際フロンティア SPIRITS」というパネルディスカッションを実施した時に出たご意見です。SPIRITS の学際型を文系でとられている先生にご登壇いただいた際にお伺いしたのですが、学際研究は社会的波及効果のあるものが多いのと、プロジェクトからの派生が多く、SPIRITS をとっているときだけではなく、その後にいくつかの派生の研究が発生して活動の可能性が広がったとい

うのが大なメリットのようです。URA に求められることとして、一つは学際研究の評価の難しさをどう考えるか。自分の専門の領域だったら、その分野のジャーナルに出して、評価されることが重要だけれど、学際の場合は成果をどこに出していくかという評価の難しさ、学際であるがゆえの難しさというのがあると思います。これは今日、押海さんのほうからもお話いただければと思います。もう一つは、接点のない分野の研究者をつなぐ機能ですね。コーディネーターとしての機能。あとは、情報発信の仕方、市民とのコミュニケーションのとり方ということで、広報的なこともニーズとして上がってきました。

学内ユニット

次に、学内ユニットに関して。この学内ユニットは、学際融合教育研究推進センターというところに置かれています。この学際センターですが、今日この後のセッションで100人論文のセッションがありますが、その100人論文を立ち上げた宮野公樹先生が所属されているセンターです。100人論文のほかにも、このユニット制度ですとか、分野横断プラットフォーム構築事業など、学際に関する幾つかの施策を実施しているところです。そのユニット制度を今日は少しご紹介したいと思います。まずユニットとライトユニットという2種類がありまして、ユニットのほうは、学際的なメンバーから成る研究教育グループをユニットと称しています。大学の正式組織として認定しているものですが、学際センターはその設置承認と制度的補助をしています。ライトユニットのほうは、名前のごとく、もう少しライトなもので、柔軟な研究会グループとして位置づけられています。学際センターがライトユニットの呼称を付与するような形で、学内的身分を与えているというものです。詳しくは学際センターのウェブサイトがリニューアルされて、かなりいろいろな事例が挙がっていますので、ぜひご覧ください。

これも先ほどのSPIRITSと同じように、どこの分野でこのユニットが組まれているかというのがホームページに載っています。例えば、心理学、教育学、医学、情報学、霊長類学のように。それを分野と部局を色分けしていく

と、また少し傾向が見えてきます。スライド13～16ページにまとめました。まず、学内ユニットでどうして今あるものが立ち上がっているかという、COEやリーディング大学院、SGU、COI、世界展開力等々の部局横断型の中大規模外部資金に申請するときにその活動を契機にユニットが形成されています。学内で分野横断的な、部局横断的なものということで位置づけて承認していくというものです。SPIRITSを契機としてユニットが組まれたものの中にはあります。人文系よりも社会科学系のものが多いというのが文系に関する特徴で、また、地域研究系が多いのと、先ほどの例で言うと、学際分野を中心とした部局自体が多いということもあります。傾向としては、何かしら文系の分野が関わっているユニットの割合が38件中27件。ライトユニットに関しては、全ての分野と銘打っているものも多いせいで、10件中9件に文系が入っています。傾向としては、心理学、教育学、あと、経済学、経営管理など、先ほど言ったように社会科学系が多いのと、京大の強みとして地域研究系のものが多い。テーマとしては、先ほどSPIRITSで上がってきたのと同じで、高齢化社会と防災ですね。ほかには環境問題、あと広くて、SDGs、フューチャーアースといったものが多いのと、最近の人工知能（AI）とか、SPIRITSのときはデジタル・ヒューマニティーズ、アーカイブがありましたが、もっと広くデータサイエンス系のものがあります。こういった傾向が見えてくる。

今後に向けて

このような傾向を踏まえて、最後に今後に向けてということでお話したいと思います。スライドは19ページです。これは、文部科学省の科学技術・学術審議会学術分科会人社系ワーキングの審議まとめから引用したのですが、人社系についてはなかなか学際難しいねと言われているその課題が、ここに集約されている気がしたので挙げさせていただきました。連携・協働という本来手段であるはずの事それ自体が目的化してしまっているというのが1点。比較的解決しやすい問題に傾いていって、本来意図するスケール感が失われている、スケールが少し小さいものがどうしてもやりやすいというので増えるというのが2点目。あと、自然科学による問題設定が主導する形となって人文学・

社会科学の研究者が自身の専門性との関連においてインセンティブを持ちにくいことなどが挙げられる。ここも後で岸本先生にぜひお話をお伺いしたいところですが、そもそも本来の目的や解決すべき課題は何かということをやはり考えていかなければいけない。ただ学際やろうねということ、学際をどうすればいいのか、プラットフォームづくりをどうするかということの前に、目的や課題が何かということの見極めが人社系としてはとても重要ではないかなと思っています。

そのようなことを考えて、幾つかの段階を考案しました。スライド 20 ページになります。

まず、最初の段階として、学際・文理融合に限らず幅を広げて考える。学術的成果のみにとどまらないで、産官学連携ですとか地域連携、社会連携なども視野に入れて、共創研究という視点で考える。昨日の個人発表でも学際の例を挙げて発表されている方々が結構多くて、産連などのご発表も、異分野融合という観点でやってらっしゃるものが多かった。そういうことも視野に入れていったほうがいいのではというのが一つ。第2段階として、先ほど言った現在や未来の社会的課題や追求すべきテーマは何か、それに応じることのできる人社系研究は何かということ、人社系のほうから探求して提示していくこと。学際研究であること自体は目的ではなくて、社会課題の解決などをまず目的に置くべきということですね。その上で、次にチーム形成や環境をどうするか、プラットフォームづくりをどうするかというノウハウ等を考える段階。この3番目に関しては議論ができていますけれども、人社系としては、その前の二つの段階でもっと考えていったほうがいいのではないかなと個人的には思っています。

これには、人社系は役に立たないということに対して、人社系というのは技術的なことを開発するのではなくて、価値そのものを考える学であり、今後、価値の軸が変わる段階で人社系研究というものが非常に役に立つものであるということをまず認識していただきたいという人社系 URA の側の思いがあります。あと、今年、コロナ禍があったということが非常に大きい。この夏、人社未来系発信ユニットのほうで「立ち止まって、考える」というオンライン集中

講義を開講したのですが、これはコロナ禍で人社系研究というのが、この問題をどのように考えていけるかというテーマのシリーズ講義です。非常に聴講される方が多かったのですが、COVID-19によって、潜在的にあった様々な社会的課題が浮上ってきて、それによって人社系研究に対するニーズが高まったことにより、人社系研究自体が先鋭化しているような気がしています。すごく社会的需要や要請が増してきているので、ここに向けて人社系が何を提示していけるかということを考えたい。「提案する人文・社会科学」ということで新たな価値の創出と共創に向けて、人社系 URA が何をしていけるかということを考えたいなと思っています。

すみません、少し長くなりましたが、以上です。トップバッターとして割と大卒の話をさせていただきました。ありがとうございます。

*¹ 発表資料に関してはこちらの URL にカラー版を掲載していますので、詳細をお知りになりたい場合はご参照下さい。 https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/assets/1_2020-RMAN-J_slide.pdf

RA協議会セッション
F-1 プロジェクトのマネージメント
「異分野融合研究・プロジェクトにおけるURAの役割について考える」

人社系の関わる事例紹介と今後の共創研究に向けて

2020年9月18日

京都大学 学術研究支援室 (KURA)

稲石 奈津子

京都大学



KYOTO UNIVERSITY

異分野融合
学際
文理融合
分野横断
文理共同・協働
文理複眼
学術知共創

KYOTO UNIVERSITY

1. SPIRITS

2. 学内ユニット

3. 今後に向けて

KYOTO UNIVERSITY

1. SPIRITS

2. 学内ユニット

3. 今後に向けて

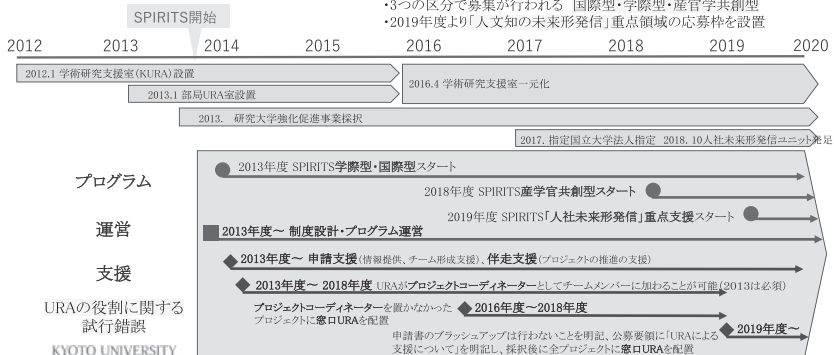
KYOTO UNIVERSITY

SPIRITSとURAの役割の変遷

SPIRITSとは？

研究大学強化促進事業の一環として、国際化の推進、未踏領域・未科学への挑戦、イノベーションの創出を加速させるため、**学際・国際・人脈融合事業「知の越境」融合チーム研究プログラム**(SPIRITS: Supporting Program for Interaction-based Initiative Team Studies)を実施。

- ・3つの区分で募集が行われる 国際型・学際型・産官学共創型
- ・2019年度より「人文知の未来形発信」重点領域の応募枠を設置



SPIRITS: 人社系研究を含む学際型の事例

		プロジェクトが設定したキーワード
平成25年度 2013	宇宙における人類の総合的研究	宇宙、歴史、宗教、倫理、政策
	京大宇宙地球科学の黎明期の研究	科学史、研究者系譜、アウトリーチ、国際貢献、社会貢献
	統合創造学の創成—市民とともに京都からの発信	統合創造学(生物学、複雑系科学、医学、社会学、経済学、看護学、生態学、哲学などの統合)、自己・非自己循環原理、複雑システム
平成26年度 2014	京都大学を拠点とする領域横断型の生命倫理の研究・教育体制の構築	生命倫理学、終末期医療、研究公正、ゲノム編集、臨床倫理
	人類未踏の超高齢社会をデザインする	医療介護システム、公共政策、地域経済、まちづくり、多面的大規模データベース
	「比良おろし」の突風被害予報システムを核とした風害適応型レジリエント・コミュニティ構築	研究成果の社会実装、文理融合、レジリエント・コミュニティ
平成27年度 2015	主体性のあるサービスデザイン：嚥下食を実現する	サービスデザイン、相互主観性、デザイン学、主体化、人間観中心設計
平成28年度 2016	将来の宇宙開発に関する道徳的・社会的諸問題の総合的研究	宇宙探査、宇宙開発、宇宙利用、宇宙倫理、ELSI(科学技術の倫理的・法的・社会的含意)
平成29年度 2017	京都の社寺の記録から描く天変地異と人々の対応	地質、オロラ、太陽、歴史、史料
令和2年度 2020	データ駆動型科学が解き明かす古代インド文献の時空間的特徴	中国哲学、印度哲学および仏教関連、データベース関連

KYOTO UNIVERSITY

人社系研究分野 学際系研究分野 自然科学系研究分野 社会貢献の取り組み

SPIRITS: 人社会系の産官学共創型と「人文知の未来形発信」重点領域の事例

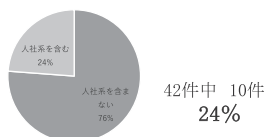
		代表者、プロジェクトが設定したキーワード
産官学共創型スタート	平成30年度2018	〈産官学共創型〉 東映京都撮影所資料を基盤とした日本映画史研究の国際的拠点形成 人間・環境学研究科・木下 千花 アーカイブ、映画メディア産業、映画史、教育 アウトリーチ
人社会重点支援スタート	令和元年度2019	〈人社会重点支援・国際型〉 人文知的「二重の越境」による産業ダイナミクス研究—アジア産業論発信と新領域確立 経済学研究科・黒澤 隆文 経営学、東アジア、産業
		〈人社会重点支援・国際型〉 冷戦期東アジアにおける学知の広報外交—国際共同研究と複数言語出版 人間・環境学研究科・土屋 由香 地域研究、科学技術、メディア・ジャーナリズム
		〈人社会重点支援・国際型〉 イスラム経済知を活用したポスト資本主義社会創出のための国際研究ネットワーク構築 アジア・アフリカ地域研究研究科・長岡 慎介 地域研究、イスラム経済
	令和2年度2020	〈人社会重点支援・学際型〉 データ駆動型科学が解き明かす古代インド文献の時空間的特徴 白眉センター／人文科学研究科・天野 恭子 中国哲学、印度哲学および仏教学関連、データベース関連
		〈人社会重点支援・産官学共創型〉 アジアの人間観から見たサイバー空間における民主主義 公共政策連携研究部・坂出 健 政治経済学、哲学、倫理、サイバーデモクラシー
		〈人社会重点支援・産官学共創型〉 SNS相談事業の社会実装と臨床的效果実証 こころの未来研究センター・塚中 千紘 臨床心理学、SNS
		〈人社会重点支援・国際型〉 デジタル化の中での「法」の役割 法学研究科・島田 裕子 社会法、IoT、AI、プラットフォーム経済
		〈人社会重点支援・国際型〉 教育ビッグデータとAI技術を用いた内省的読解力の向上 学術情報メディアセンター・Behajji Majumdar 人文社会情報学、ラーニングアナリティクス、教育ビッグデータ

KYOTO UNIVERSITY

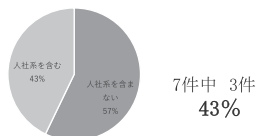
人社会系研究分野 学際系研究分野 自然科学系研究分野 社会貢献的取り組み 産業関連

SPIRITSから見る人社会系を含む学際研究の傾向

全体の学際採択例に占める
人社会関連課題の割合



全体の産連採択例に占める
人社会関連課題の割合



KYOTO UNIVERSITY

傾向

もともと学際的な学問領域

社会貢献、社会実装、アウトリーチ

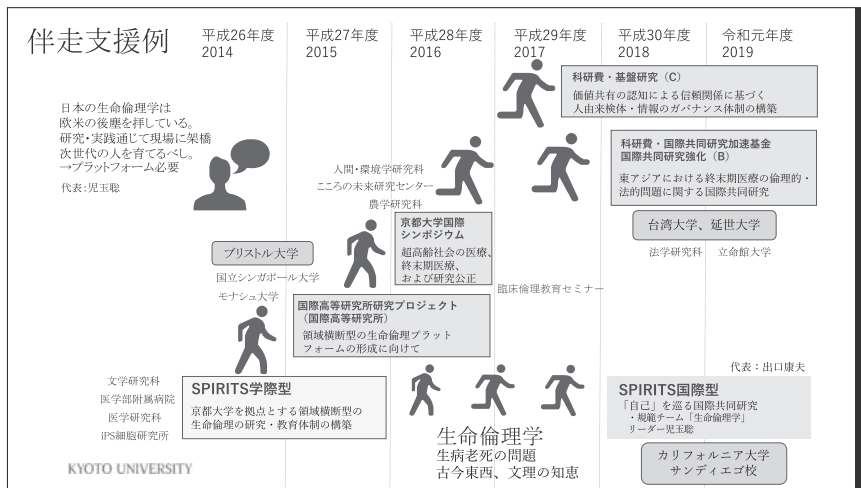
ELSI、高齢化社会

データベース、アーカイブ、デジタルヒューマニティーズ

公共政策や経済といった社会科学は言うに及ばず、
人文系に関しては倫理学に限らず結構史学、哲学も

防災・・・京大の特徴？

宇宙関連・・・京大SPIRITSの特徴？



伴走支援で果たす役割

申請時	研究者紹介 (チーム形成時など) SPRITSプログラムの趣旨説明 情報提供
支援中	定例会の開催・参加→ニーズの把握 ホームページ作成支援 (Web虎の巻の紹介、構成整理、業者の紹介など) 広報支援 (情報提供、プレスリリース作成支援、メディアへの紹介) イベント運営に関する情報提供 (スキーム、会場、業者の紹介など) 並行・派生事業の外部資金獲得支援 並行・派生事業に関する研究者紹介 KURAの他事業への紹介、連携 (国際、産連、企画、広報、他地区URA) 進捗状況のヒアリング
終了時	成果物作成支援 (報告書冊子の作成など) 事業報告書作成支援
終了後	研究者紹介 (チーム形成時など) 次期外部資金獲得支援 京大オリジナルの紹介

KYOTO UNIVERSITY

学際研究のメリット、URAに求められていること

FROM
SPIRITS「人文知の未来形発信」重点領域関連セッション
パネルディスカッション「学際フロンティアSPIRITS」
http://research.kyoto-u.ac.jp/service/topic/spirits/2017-2018_report/

10 | 学際研究 / Inter-Fields

パネルディスカッション

「学際フロンティア SPIRITS」

山内裕准教授 × 佐藤恵子特任准教授

多くの分野ではプロジェクトで、様々な分野の研究者が
協働しています。「学際フロンティアSPIRITS」もその
一例です。学際研究に関するパネルディスカッション
を開催、議論に支那のプロジェクトを基盤として、
フロンティアの学際研究プロジェクト・プロジェクト
リーダー（山内）が、学際研究を進める上でのポイントや、
プロジェクト・マネージャーに求められる役割などについて
紹介しました。



KYOTO UNIVERSITY

メリット

学際研究は社会的波及効果のあるものが多い

成果を社会に発信していくなり、あるいは社会に還元
するといった部分においては、このような学際的な取
り組みが大きな成果となる

プロジェクトからの派生が多く、以降の活動の可能性
が広がる

プロジェクトから派生したものが数多くある

今まで自分の研究だけやっていたが、成果発信や国際
ネットワークなど色々な可能性が広がった

URAに求められること

学際研究の評価の難しさ

接点のない分野の研究者を繋ぐ機能が欲しい

情報の発信の仕方、市民とのコミュニケーションの取り方
これに関する学内の専門家の紹介

1. SPIRITS

2. 学内ユニット

3. 今後に向けて

KYOTO UNIVERSITY

ユニットとライトユニット



PROJECT センターの取組み

専門に与えられない研究が育まれる環境をつくるために、学際センターでは様々なプロジェクトを実施しています。研究教育との連携を促進したプロジェクトや、新しいイノベーションが生まれるための取り組み、産学官連携の促進に貢献し、社会に与える価値を高めるなど、その活動は多岐に渡ります。

FROM
京都大学 学際融合教育研究推進センターWEBサイト
<http://www.cpieir.kyoto-u.ac.jp/project/unitssystem/>

KYOTO UNIVERSITY

ユニット制度

専門の枠を超えた研究教育活動を推進

About

本学における専門の枠を超えた研究教育活動を推進するため、学際的なメンバーからなる研究教育グループを“ユニット”と称し、学際センターはその設置承認と制度的補助をしています。

『ユニット』は公式の学内組織として、『ライトユニット』はより柔軟な研究会的なグループとして活動しており、学際センターが伴走のスタンスでともに活動しています。

System

・ユニット

様々な分野の本学教職員から構成される学際的なテーマを持った研究または教育グループ。ユニットメンバーは学内兼任という立場。京都大学の正式な組織として認定され、他大学や企業、海外の組織との正式な契約の締結が可能。ユニットの事務機能はそのユニットメンバーの所属部局が担う。

ユニット設置には、申請書提出の後、学際センター運営委員会の審議が必要。財源の有無は問わず、学際的な研究テーマ、構成員であり、本学の学問の豊かな土壌づくりに貢献するかどうか審査基準。更新あり。2年に一度の中間審査はあるが、センターへの活動報告義務などはなし。現在38ユニットが自由に活動している(2020/4/1現在)。なお、これまでに11ユニットが廃止しており、新陳代謝のある柔軟な制度設計が特徴の一つ。

・ライトユニット

ユニット同様、様々な分野の本学教職員から構成される学際的なテーマを持った研究または教育グループであるが、京都大学の正式組織ではなく、学際センターがライトユニットの呼称を付与した研究会のような位置づけ。ユニット長は有期雇用教職員でも可で、ユニット設置申請も極めて簡素。メンバーも積極的に他大学や他組織から構成され、研究会といった体。

ユニット：人社系研究を含む学内ユニットの事例

	ユニットが設定した分野	関連部局
Unit	心の先端研究ユニット	[心理学×教育学×医学×情報学×霊長類学]
	地域連携教育研究推進ユニット	[地域研究×教育学×工学]
	統合複雑系科学国際研究ユニット	[経済学×理学×工学×医学]
	レジリエンス実践ユニット	[工学×防災×経済学×政治学]
	超高齢社会デザイン価値創造ユニット	[情報学×医学×工学×経済学]
	高度情報教育基盤ユニット	[情報学×医学×教育学]
	福島復興支援研究連携推進ユニット	[あらゆる分野]
	社会科学統合研究教育ユニット	[経済学×情報学×地域研究×医学]
	熱帯林保全と社会的持続性研究推進ユニット	[環境学×農学×地域研究×文学]

人社系研究分野・部局 学際系研究分野・部局 自然科学系研究分野・部局

KYOTO UNIVERSITY

	ユニットが設定した分野	関連部局
Unit 活力ある生涯のためのLast5Xイノベーションユニット	[あらゆる分野]	工学研究科、医学研究科、理学研究科、薬学研究科、情報学研究科、経済学研究科、再生医科学研究所、生存圏研究所、化学研究所、防災研究所、医学部附属病院、医学研究科附属ケムコムセンター、環境安全保健機構、学際融合教育研究推進センター先端医工学研究ユニット、物質・細胞統合システム拠点、学術情報メディアセンター
水・エネルギー・災害教育研究ユニエスコチュエユニット	[防災×工学×農学×エネルギー科学]	大学院総合生存学館、防災研究所、農学研究科、工学研究科、理学研究科、情報学研究科、エネルギー理工学研究科、エネルギー科学研究科、アフリカ地域研究資料センター、生態学研究センター、東南アジア地域研究所、アジア・アフリカ地域研究研究所、経済学研究科、教育学研究科、地球環境学、医学研究科、経営管理大学院、経済学研究所、重長類研究所、生存圏研究所
森里海連環学教育研究ユニット	[生態学×情報学×社会科学]	フィールド科学教育研究センター、人間・環境学研究科、こころの未来研究センター
政策のための科学ユニット	[社会科学×生態学×経済学×理学]	医学研究科、経済学研究科、工学研究科、人間・環境学研究科、農学研究科、経営管理大学院、高等教育研究開発推進機構、情報環境機構、学際融合教育研究推進センター、こころの未来研究センター、白眉センター、物質・細胞統合拠点
人社未来形発信ユニット	[文学×経済学×地域研究]	文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、人間・環境学研究科、経営管理研究部、人文科学研究所、経済研究所、東南アジア地域研究研究所、こころの未来研究センター
人工知能研究ユニット	[情報学×教育学×理学]	情報学研究科、教育学研究科、薬学研究科、iS脳研究所
ヒマラヤ研究ユニット	[あらゆる分野]	重長類研究所、野生動物研究センター、東南アジア研究所、こころの未来研究センター、経済学研究科、防災研究所、教育学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究所、地球環境学、工学研究科、理学研究科、医学研究科、医学研究科(調整中)

人社系研究分野・部局 学際系研究分野・部局 自然科学系研究分野・部局

KYOTO UNIVERSITY

	ユニットが設定した分野	関連部局
Unit スーパーグローバルコース人文社会科学系ユニット	[経済学×文学×農学]	経済学研究科、文学研究科、農学研究科
グローバルヘルス学際融合ユニット	[医学×農学×地域研究×地球環境学]	医学研究科、情報学研究科、工学研究科、東南アジア研究所、地球環境学、アジア・アフリカ地域研究研究所、文学研究科
アジア環太平洋研究ユニット	[地域研究×医学×経済学×文学]	東南アジア地域研究研究所、経済研究所、人文科学研究科、大学院総合生存学館、大学院法学研究科、大学院経済学研究科、大学院医学研究科、重長類研究所、国際高等教育院
アフリカ学際研究拠点推進ユニット	[地域研究×文学×理学×医学×工学]	文学研究科、理学研究科、工学研究科、人間・環境学研究科、アジア・アフリカ地域研究資料センター、地球環境学、重長類研究所、野生動物研究センター、アフリカ地域研究資料センター
アカデミックデータ・イノベーションユニット	[情報学×文学]	文学研究科、理学研究科、医学研究科、情報学研究科、生存圏研究所、防災研究所、東南アジア地域研究研究所、学術情報メディアセンター、高等教育研究開発推進センター、総合博物館、大学図書館、京都大学研究連携基盤、情報環境機構、図書館機構、学術研究支援室
アジア研究教育ユニット	[文学×経済学×農学×教育学]	文学部・文学研究科、経済学部・経済学研究科、経営管理大学院、アジア・アフリカ地域研究研究所、教育学部・教育学研究科、文学部・農学研究科、東南アジア研究所、人文科学研究所、国際高等教育院
スマートエネルギーマネジメント研究ユニット	[工学×エネルギー科学×情報学×経済学]	工学研究科、エネルギー科学研究科、エネルギー理工学研究科、経済学研究科、情報学研究科、学術情報メディアセンター
宇宙総合学研究ユニット	[工学×地球環境学×理学×農学×文学]	文学研究科、理学研究科、工学研究科、人間・環境学研究科、エネルギー科学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究所、総合生存学館、生存圏研究所、防災研究所、基礎物理学研究所、総合博物館、こころの未来研究センター、白眉センター、学際融合教育研究推進センター、国際高等教育院

人社系研究分野・部局 学際系研究分野・部局 自然科学系研究分野・部局

KYOTO UNIVERSITY

	ユニットが設定した分野	関連部署
Unit 次世代研究創成ユニット	[あらゆる分野]	白眉センター、学術研究支援室、研究推進部
Future Earth 研究推進ユニット	[地域研究×生態学×地球環境学×工学]	東南アジア研究所、生態学研究センター、地球環境学、情報学研究科、農学研究科、工学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、フィールド科学教育研究センター、地域研究統合情報センター、こころの未来研究センター、防災研究所、生存圏研究所
インフラシステムマネジメント研究拠点ユニット	[工学×防災×経営管理]	工学研究科、防災研究所、経営管理研究部
Light Unit リプロダクティブ・ヘルス&ライフ ライトユニット	[医学×社会医学×社会科学]	池田裕美枝(医学部附属病院産婦人科、医局員、非常勤医)
サイバー・デモクラシー・ライトユニット	[情報学×哲学×政治学]	坂出 健(公共政策大学院・経済学研究科、准教授)
研究者越境マインド研究ライトユニット	[あらゆる分野]	井出和希(IFIS細胞研究所 上廣倫理研究部門・特定助教)
調和ある地球社会研究ライトユニット	[あらゆる分野]	浅利実鈴(地球環境学・准教授)
芸術と科学リエンライトユニット	[情報学×文学×工学]	漆 丈俊(産官学連携本部、特定准教授)
学研究成果の受け取られ方を考えるライトユニット	[あらゆる分野]	設楽成実(東南アジア地域研究研究所、助教)
学問と社会をつなぐコミュニケーション探究ライトユニット	[社会科学×理学×文学]	清水智樹(総務部広報課国際広報室、特定職員)
京大らしき研究ライトユニット	[環境学×工学×文学]	酒井 敏(人間・環境学研究科、教授)
《究極の選択》研究ライトユニット	[あらゆる分野]	大庭弘継(工学研究科・研究員)

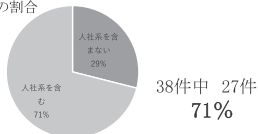
KYOTO UNIVERSITY

人社系研究分野・部局 学際系研究分野・部局 自然科学系研究分野・部局

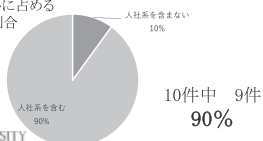
学内ユニットから見る人社系を含む研究ユニットの傾向

COE、リーディング大学院、SGU、COI、世界展開力等の部局横断型申請、活動を契機にユニット化されることが多い
SPIRITSを契機としたものもある
京大はもともと学際的分野の部局が多い
人文学よりも社会科学系のものが多い、また地域研究系が多い
ライトユニットは他大学のメンバー、研究者以外のメンバーも多く、研究の成果発信、インフラを考えるようなテーマが多い？

全体のユニットに占める
人社系関連ユニットの割合



全体のライト・ユニットに占める
人社系関連課題の割合



KYOTO UNIVERSITY

傾向

心理学、教育学
経済学、経営管理
地域研究
高齢化社会
防災、環境問題
SDGs、フューチャープース
人工知能(AI)
データサイエンス

1. SPIRITS

2. 学内ユニット

3. 今後に向けて

KYOTO UNIVERSITY

(科学技術と社会の調和に向けた自然科学との連携・協働とその課題)

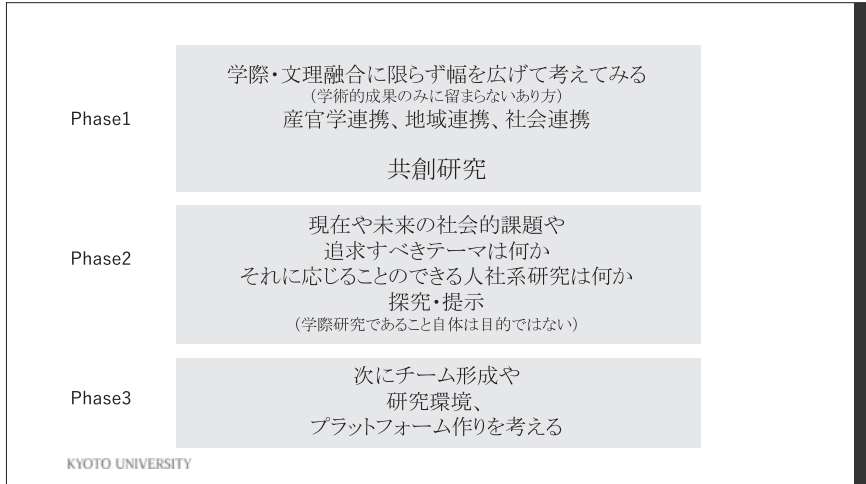
これまでも自然科学との連携・協働は複数の場において進められているが、そうした実践の場面においては、経験的にいくつかの困難が見出されている。

例えば、連携や協働という本来手段であるはずの事柄それ自体が目的化してしまうことや、連携・協働の組み合わせにより比較的解決しやすい問題に傾いて本来意図する研究のスケール感が失われることがあること、また、実際に問題が生じる場となる自然科学による問題設定が主導する形となって人文・社会科学の研究者が自身の専門性との関連においてインセンティブを持ちにくいこと、などが挙げられる。

FROM
科学技術・学術審議会 学術分科会
人文・社会科学振興の在り方に関するワーキンググループ
「人文・社会科学が先導する未来社会の共創に向けて」(審議
のまとめ) (平成30年12月14日)

そもそも本来の目的や
解決すべき課題は何か？

KYOTO UNIVERSITY



「役に立つ」ということには二種類あって、既に与えられている目的に対して手段として役に立つだけがすべてではありません。こういう目的遂行的、あるいは手段的な有用性とは別に、**価値を創造することで役に立つ**という次元があります。

手段的な有用性ということだけでは、与えられた目的が変わってしまえば、あるいは価値の軸が変わってしまったら、とたんに役に立たなくなるわけです。歴史の30年、50年、100年という長いスパンで考えてみれば、**社会の目的や価値の軸というものは必ずドラスティックに転換**していきます。

手段的な「役に立つ」ということの中からは、歴史の転換期に新しい社会の目的や価値の軸を創造することは決して出てきません。

FROM
「大学はもう死んでいる？トップユニバーシティからの問題提起」
(2020年・集英社) 吉見俊哉先生の発言

工学系が目的に対する手段の学であるとするならば、
文系はむしろ価値そのものの学である
(目的遂行的＝手段的な有用性と価値創造的な有用性)

KYOTO UNIVERSITY

